

第 1 章 本業務の背景と目的

第1章 本業務の背景と目的

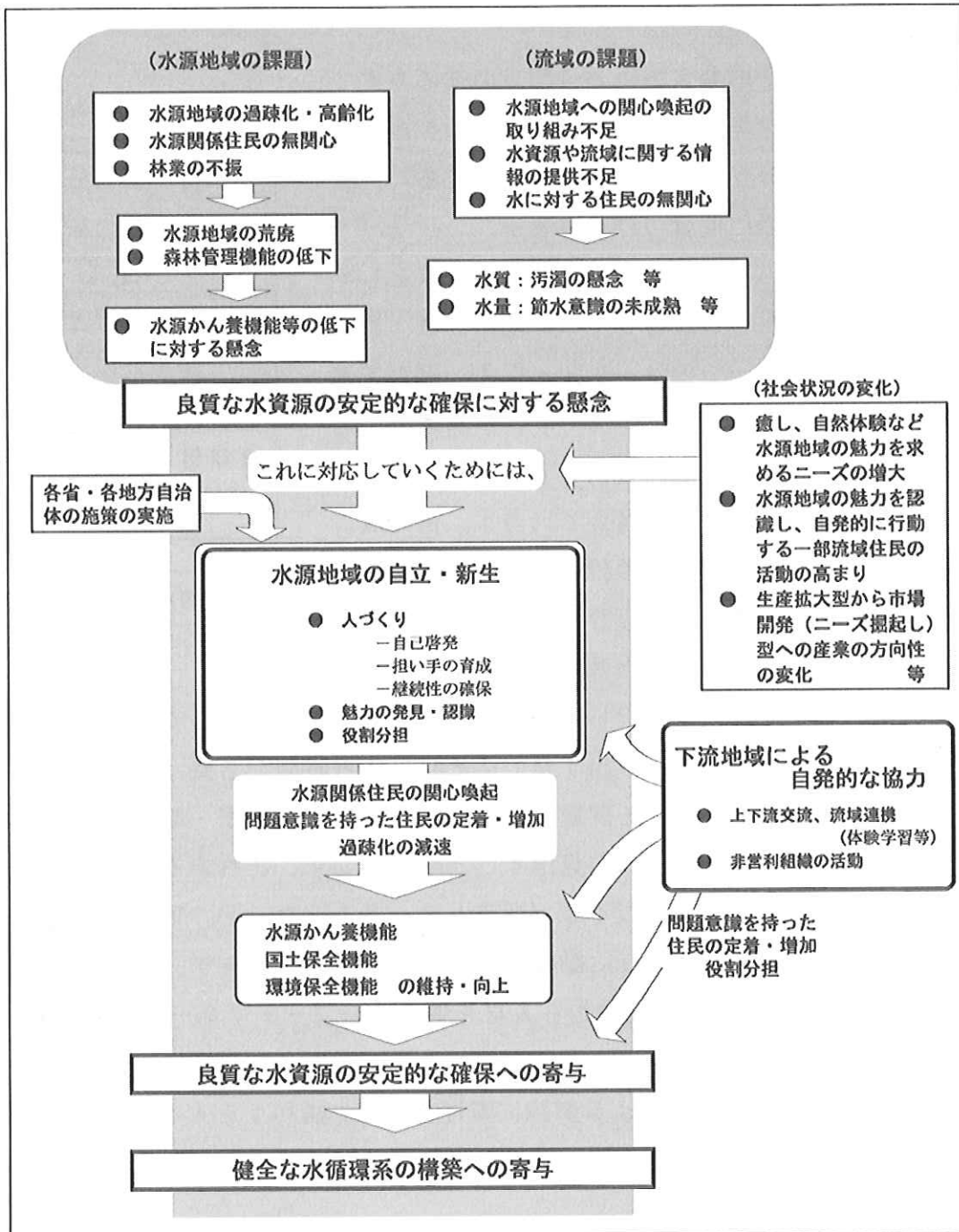
1. 本業務の背景と目的

水源地域では、過疎化と高齢化の進展により水資源を育む水源地域の持続的な地域経営が困難となっており、ひいては良質な水資源の安定的な確保において様々な懸念がもたらされています。このため、流域の誰もが水源地域に経済的・文化的な関与を図ることを通じて、良質な水資源の安定的な確保への寄与を図ることが必要となっています。

次図は、水源地域対策において、流域が一体となって取り組む必要性について整理したものです。水源地域や下流受益地域の自立的・自発的な行動が、良質な水資源の安定的な確保に結びつくと考えられます。

このような行動を誘発するには、まず、問題意識を持った人々の率先的な行動が必要となります。そして、活動が持続的に展開するためには、このような活動に必ずしも関心の高くない人々も関与していく仕組みが必要です。

本調査は、上下流活動に関心の高くない層の住民等も流域活動に参加し、上下流全体が一体となり水源地域活性化を促進する仕組みづくりの調査・検討を進めていくために必要なノウハウを集積し、他の流域でも応用できる手法として整理していくことを目的としています。



『新世紀に向けて－水源地域の自立・新生と流域一体となった取り組みを目指して－（平成12年4月）』より

図 健全な水循環系の構築のための水源地域対策

2. 調査の進め方

本調査では、以下の考え方により調査の進め方について、概ね3カ年を見通して流域が一体となった水源地域活性化の仕組みを考えていくこととしており、今年度は、その1年目に位置づけられます。

これは、流域というある程度広い地域を対象として本調査の目的を果たし定着させていくためには、概ね3カ年程度の期間を一つのサイクルと捉え、調査を進めることが必要と考えているためです。水源地域の活性化に資する「人材」に焦点を当てている本調査においては、最低限必要な期間と考えています。例えば、ハード事業でも、現状と課題の分析のための調査、構想の立案、計画の立案、実施設計と複数年の段階を経て、建設・供用に至ります。水源地域活性化においても、担い手の現状と課題を分析し、当事者が水源地域を活性化していくための戦略を描き、はじめの一步を踏み出すまでにそれ相応の時間が必要となります。

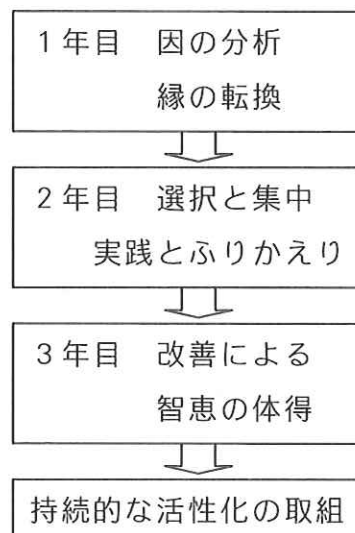
1年目は、当該流域が抱える課題（因の分析）を捉え、閉塞・暗転した状況から好転への転換点（場の改善）を見出すことが中心です。これまでの経験から、ステークホルダーによる戦略づくり（バランス・スコアカード、下記に解説）を行い、関わる人々の一人ひとりに動機付けと目標設定を行います。そして、転換をもたらす人材を見出し、他地域から人材を巻き込むコーディネート（縁の転換）に多くの時間が費やします。

2年目は、「選択と集中」による実践に繋げていく。携わった人々が「実践とふりかえり」を繰り返すことにより、リアルタイムで戦略そのものが「深化」をし始めます。

3年目は、改善による「持続化」です。この段階を踏むことにより、関わった人々にとって「知識」が「経験」を通じた「智恵」となります。関わった人々が体得した智恵は、本事業終了後も流域一体となった水源地域の自立的・持続的な活動を誘発する原動力となります。

1年目の今年度は、当該流域が関わる課題を整理しております。

“3年1サイクル”



3. 調査対象流域

本調査は、特性の異なる3つの流域のケーススタディを通じて情報収集（モニタリング）を行うこととしています。

対象流域	主な対象地域	立地の特性
最上川流域	山形県 長井市周辺地域	最上川は、山形県内を縦断する河川で、その多くが最上川流域に属す。松尾芭蕉の奥の細道でも知られる最上川は、古くから舟運が栄え、北前船が上方から運んできた文化により、独特の地域文化を育んできた。長井市は、電子部品メーカーが立地し、弱電産業で知られているほか、環境保全のまちづくりとしても全国的に知られている。
五ヶ瀬川流域	宮崎県 五ヶ瀬町周辺地域	五ヶ瀬川流域は、天孫降臨の歴史で有名な高千穂町を含む流域である。下流の延岡は繊維産業の大規模メーカーが立地している。五ヶ瀬町は、九州で唯一のスキー場を持ち、雄大な阿蘇の自然とも隣接する地域である。
吉野川流域	高知県嶺北地域 及び 吉野川流域全体	吉野川は、四国三郎吉野川と言われる大河川である。そこを流れる水は、途中で分水して香川用水として香川県民の生活や産業に欠くべからざる存在となっている。吉野川の源流である嶺北地域では、進行する過疎化と高齢化の中で、自律的な地域づくりを目指して、流域の連携にも取り組むNPOが活動している。

